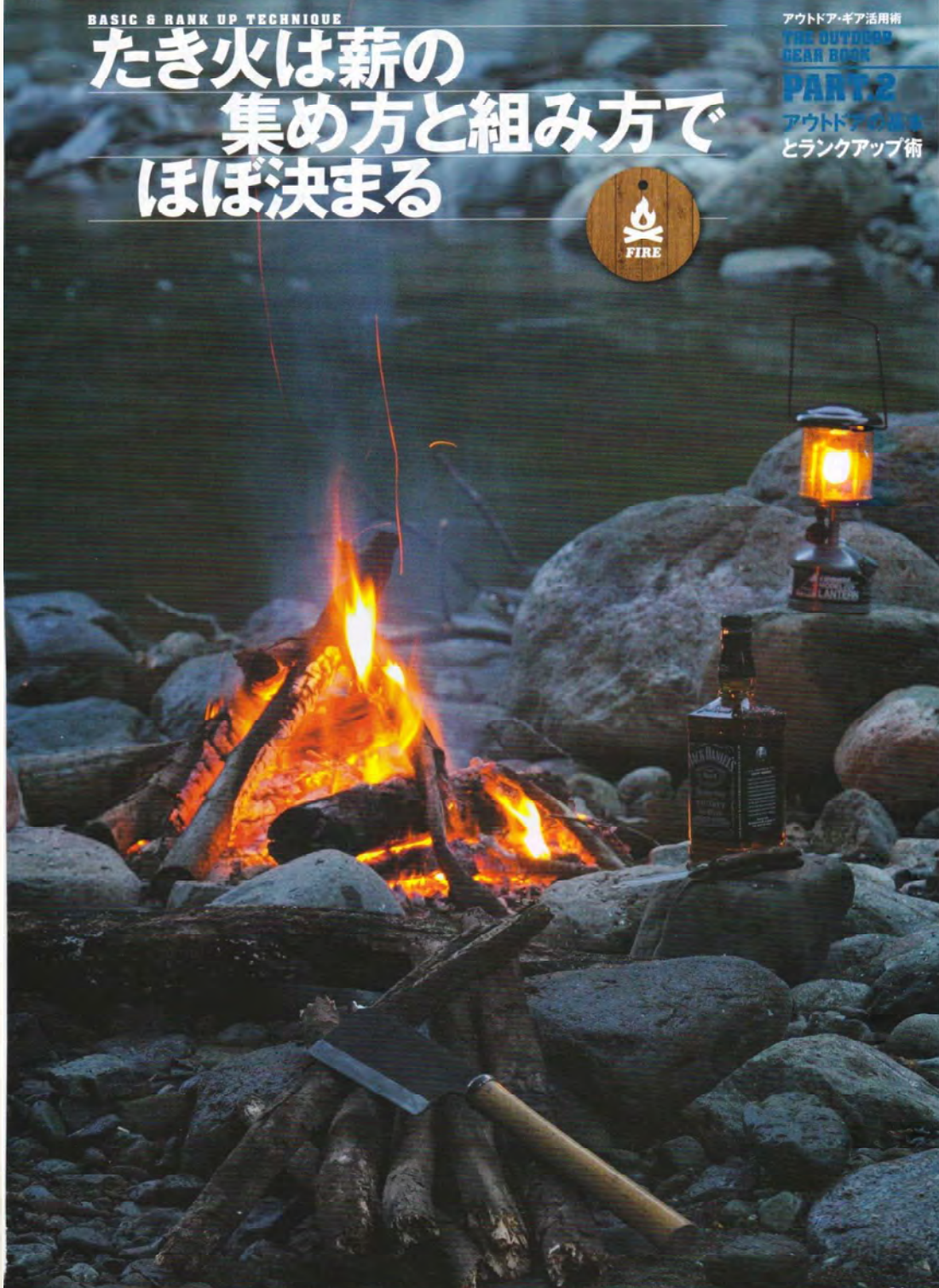


BASIC & RANK UP TECHNIQUE

# たき火は薪の 集め方と組み方で ほぼ決まる



**た**き火はキャンプの醍醐味のひとつ。ただ単に火を眺めているだけで、心が満たされる。街の暮らしでは味わえない贅沢な遊びなのだ。しかし、いざたき火をしようと思っても、火をおこすという一見簡単そうなことができるだろうか。意外と正しいたき火のやり方は知らないという人も多い。ここでは薪の束に、適当な薪にもやみにライターの火を近づけても、なかなかうまくは燃えしてくれないものだ。

たき火をおこすには、着火までの準備が大切。薪はなるべく乾いているものを小枝から太い木まで、まんべんなく集め、焚きつけにはスギやマツの葉を使う。小枝から徐々に太い木に火が移っていくように薪を重ねて組んでいくのだ。熱を逃がさないように薪は束にして置き、そのうえで空気の通り道をきちんと作ってやる。ここまで準備ができたらようやく着火だ。薪が乾いていれば、何もなくても火は勝手に大きくなっていく。あとは状況を見て少しずつ薪をくべていけばいい。

現在はたき火台が必要なキャンプ場が多いが、直火でOKの場合は、灰になるまで燃やしつつ、砂や土をかけてたき火のあとを残さないようにする。それがたき火のマナーだ。

## 3 薪を組む

### 薪はギュッと束ねて置く

たき火は、細い枝に火を、少しずつ太い木に移していくことで大きくしていく。そのために、焚きつけ用のスギの葉、細い枝、太い枝と順番に重ねて組むとよい。火床に太い薪を並べておくと、地面からの冷気や湿気を抑えられる。火床の薪にはそのうち上の火が移る



一番下に太い薪を並べる。後で細き(おき)になってゆっくと燃える



スギの葉の上に、鉛筆くらい太さの枝を束にして集める



大人の親指くらいの太さの薪とさらに太い薪を、方向を揃えて置く

## 4 着火して空気を送る

### 火がついたら放っておいて大丈夫

薪を組んだら、スギの葉に着火する。ここで火が上がれば、小枝から少し太い枝まで火が移れば大丈夫。しばらくそのまま放っておこう。むやみにいじると逆に消えてしまう。炎が安定したら、さらに太い薪をちょとずつ足して、火を育てていく



スギの葉に着火。火が弱々しくつぶっているような場合は、口でひと吹きして空気を送ってやると、ポッと炎が上がります

## “通”を気取れる役立ちテクニック

### 湿った木は表皮を削る



雨の後などで乾いた薪が手に入らない場合、木の表面を削ると中は乾いていることが多い。これでたき火をおこす。ナイフで枝に切り込みを入れておくと火が付きやすい

### 新聞紙で炭火を起こすワザ



細長く折ったたんだ新聞紙をくると巻いて着火すると、長い時間かけてジワジワと火が燃える。着火剤なしで炭火をおこす必要があるときに覚えておくと便利

## たき火の基本テクニック

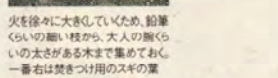
### 1 薪は現地で調達する

#### 必ず乾いた薪を集めるべし

日本は森林大国だ。森や野山、河原などキャンプをするような場所なら、たき火の燃料となる薪は大抵どこにでも落ちている。ただし、必ずよく乾いている薪を集めること。ちよつとでも湿っている、たきつけが難儀になる。両手に抱えるほどの薪で、3~4時間はたき火を楽しめる



森に落ちている枝や河原の流木などを拾い集めて薪にする。生えている木を折ったりするのはマナー違反。そもそも生木はよく燃えない



火を徐々に大きくしていくため、鉛筆くらい太さの細い枝から、大人の親指くらいの太さがある木まで集めておく。一番右は焚きつけ用のスギの葉

## 2 かまどをつくる

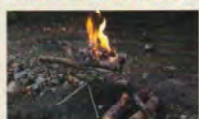
### かまどがあれば料理にも役立つ

石を組んで作るかまどは、必ずしもたき火に必要なものではないが、あれば蓄熱性上がり、効率良く火を燃やせる。網や鉄板を渡すこともできるので、料理をする場合にも重宝する。火床にうまく空気を取り入れられる形にするのがポイントだ



かまど完成。火床の直径は40~50cm。あまり大きいと蓄熱性が落ちる

### 直火NGならたき火台を使う



きれいな芝生のキャンプ場などでは、直火でのたき火を禁止しているところも多い。そういうところではたき火台を使う。最近はアウトドアの定番アイテムとなっている



#### スノーピーク / 焚火台L

1万5600円+税  
スノーピーク  
☎0120-010-660

4枚の三角プレートで構成されるシンプルな設計で、簡単に収納、展開できる。本体は1.5mmのステンレス製で、耐久性抜群。料理を楽しむオプションが豊富なのもうれしい